様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月３０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18730412
研究課題名（和文）
学級内の集団構造が学業への動機づけに及ぼす影響過程に関する縦断的研究
研究課題名（英文）
Longitudinal study of student’s motivation and peer relationships in classroom.

研究代表者
石田　靖彦（ISHIDA YASUHIKO）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10314064

研究成果の概要：
本研究では，学級内の友人関係や学級集団のあり方と学習に対する動機づけとの関連について縦断的に検討した。その結果，これらの関連には友人関係や学級集団のあり方が動機づけに及ぼす影響と，児童生徒の志向性や動機づけが友人関係に及ぼす影響という２つの異なる影響過程が認められ，児童生徒の動機づけを高めるためには，親密な友人関係の形成だけでなく，個々の努力や成長を認めるような学級目標の設定や児童生徒間の学習に関する相互作用を高める工夫が必要であることが示された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：教育心理学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：学級集団，友人関係，動機づけ，縦断的研究

１．研究開始当初の背景

これまでの動機づけや学業達成に関する研究領域では，成功や失敗事態における帰属様式，学業に対する目標や志向性，統制に関する信念や自己効力感などに関して数多くの研究が行われてきた。しかしこれらの研究は，基本的に「個人の内的な特徴やプロセス」に焦点をあてたものであり，教師や級友との関係といった「社会的文脈の効果」については十分検討されてこなかった。

児童生徒の学習は，教師や他の級友との関係の中で行われるものであり，なかでも多くの時間や経験を共有する学級内の友人関係や学級集団のあり方は，児童生徒の学習活動に大きな影響を及ぼすと考えられる。

本研究では，多くの時間や経験を共有する学級内の友人関係や学級集団のあり方に着目し，学級内に形成された友人関係や学級集団のあり方は，児童生徒の学習に対する動機づけや学業達成，適応感などにどのような影

響を及ぼすかについて検討することを目的とする。

ところで，このような学級内の友人関係や学級集団のあり方が，動機づけや学業達成，適応感に及ぼす影響について検討した研究はこれまでにも存在する。しかしながら，これまでの研究の多くは，学級内の友人関係と動機づけや学業達成，適応感との関連を１回きりの調査によって検討したのみで，それらの関係を縦断的に検討した研究は極めて少ない。児童生徒は，すでに形成された友人関係や学級集団の中に放り込まれるわけではなく，彼ら自身が友人関係を形成するという側面がある。つまり，学級内の友人関係や学級集団のあり方と，動機づけや学業達成，適応感との関連は，前者が後者に影響を及ぼすという影響過程だけでなく，後者が前者に影響を及ぼすという影響過程も想定され，１回きりの調査では，これらの影響過程を分離できないという問題点がある。

本研究では，児童生徒の特徴が学級内の友人関係に及ぼす影響と，学級内の友人関係が動機づけや学業達成，適応感に及ぼす影響をできる限り区別し，それらの影響過程について縦断的データを用いて検討することを第一の目的とする。

第二の目的は，児童生徒の動機づけや学業達成，適応感を高めるためには，教師はどのような働きかけが可能であるかについて検討することである。児童生徒の特徴が彼らの友人関係に影響を及ぼし，またその友人関係が児童生徒に影響を及ぼすことが明らかにされたとしても，児童生徒の動機づけや学業達成，適応感を高めるためには，教師としてどのような指導ができるのかについて検討しなければ教育上の問題は解決できない。そこで本研究では，教師の指導のあり方が，児童生徒の友人関係や動機づけや学業達成に及ぼす影響についても検討する。

２．研究の目的

以上の問題を踏まえ，本研究では，学校での学習活動の場であるとともに，多くの時間を過ごす学級内の友人関係や学級集団のあり方に着目し，主に縦断的データを用いて，以下の３点について検討することを目的とする。

（1）動機づけ志向性や学習志向性といった児童生徒の個人の特徴は，学級内の友人関係や仲間集団の形成にどのような影響を及ぼすか

（2）形成された学級内の友人関係や学級集団のあり方は，児童生徒動機づけや学業達成，適応感にどのような影響を及ぼすか

（3）児童生徒の動機づけや学業達成，適応感を高めるためには，教師はどのような働きかけが可能であり，教師の指導のあり方は，児童生徒の友人関係や動機づけや学業達成にどのような影響を及ぼすか

３．研究の方法

本研究の第一の目的である（1）動機づけ志向性や学習志向性といった学業面での個人の特徴が，学級内の友人関係や仲間集団の形成過程に及ぼす影響と，第二の目的である（2）形成された学級内の友人関係や学級集団の特徴が，児童生徒の動機づけや学業達成，適応感に及ぼす影響については，以下に示す 4 つの研究により検討した。それぞれの研究における方法と手続きを示す。

（1）生徒の動機づけ志向性が，学級内の友人関係の形成と学業面，対人面での適応感に及ぼす影響

本研究では，児童生徒の個人差要因として動機づけ志向性（課題志向性，社会志向性）に着目し，動機づけ志向性の個人差が学級内の友人形成に及ぼす影響と，動機づけ志向性が学級内での友人関係を媒介として対人面・学業面での適応感や学業達成に及ぼす影響について縦断的に検討した。

学級内の友人関係の形成過程を検討するため，対象は中学１年生とし，入学当初に生徒の動機づけ志向性を質問紙により測定し，学級内の友人関係と適応感については，5 月，7 月，12 月の 3 回にわたって質問紙調査により測定した。

（2）学級内の目標構造と自己効力感が友人関係の形成と学習行動に及ぼす影響

本研究では，積極的な学習行動に及ぼす要因として，学級における評価基準の認知（学級においてどのようなことが評価され重視されているかという認知）とその評価基準に対する自己効力感（学級において評価され重視されているものをどの程度遂行できる自信があるか）に着目し，学級における評価基準の認知とその基準に対する自己効力感が積極的な学習行動に及ぼす影響と，評価規準の認知やその効力感における生徒の類似性が学級内の友人形成に及ぼす影響，形成された友人が生徒の効力感や学習行動に及ぼす影響について縦断的に検討した。

対象は中学生とし，上記に関する質問紙調査を 10 月と翌 2 月の 2 回にわたって実施した。

（3）学級内の目標構造が生徒の学習志向性を媒介として学習行動に及ぼす影響

本研究では，学級内の学習に関する目標構造として，パフォーマンス重視，マスタリー重視に着目し，これらの目標構造が生徒の学習志向性（パフォーマンス志向，マスタリー志向）を媒介として，学習行動に及ぼす影響

について検討した。その際，生徒の学習効力感の違いについても検討した。
対象は中学生で，上記に関する質問紙調査を実施した。

（4）学級内の友人関係や学級集団のあり方が個別的学習志向，協同的学習志向に及ぼす影響
本研究では，学級内の友人関係や学級集団のあり方が，学習志向性に及ぼす影響について，協同的な学習への志向性と個別的な学習への志向性を区別して検討するとともに，小学生と中学生の違いについて検討した。
学級内の友人関係や学級集団のあり方については，学級内の親友の存在，目標・ライバルの存在，級友に対する比較意識や他学級への対抗意識などを問う質問紙を作成し，小中学生を対象に実施した。

本研究の第三の目的である（3）児童生徒の動機づけや学業達成，適応感を高めるためには，教師はどのような働きかけが可能であり，教師の指導のあり方は，児童生徒の友人関係や動機づけや学業達成にどのような影響を及ぼすかについては，以下に示す 3 つの研究により検討した。それぞれの方法と手続きを示す。

（5）学級内の相互作用を促進し，児童の動機づけや学業達成を高める教師の指導行動の収集と分類
本研究では，学級内の相互作用を促進し，児童の動機づけや学業達成を高めるために，教師はどのような指導を行っているかについて，現職教員を対象にした自由記述調査を実施して実際の指導行動を収集し，それらを分類した。

（6）教師の指導行動と児童の学級内の友人関係や学習への動機づけ，学業達成との関連
本研究では，教師の指導行動のあり方と，児童の学級内の友人関係のあり方や授業態度，学習への動機づけ，学業達成などとの関連ついて縦断的に検討した。
児童の学級内の友人関係や学習態度，動機づけといった児童の意識面，行動面については，これらを多面的に測定する質問紙を作成し，1 学期，3 学期の 2 回にわたって縦断的に実施した。
また教師の指導行動については，授業観察を行うとともに，それぞれの時期の指導について教師に対する面接調査を複数回実施した。

４．研究成果
本研究の目的である（1）動機づけ志向性や学習志向性といった学業面での個人の特徴が，学級内の友人関係や仲間集団の形成過程に及ぼす影響，（2）形成された学級内の友人関係や学級集団の特徴が，児童生徒の動機づけや学業達成，適応感に及ぼす影響については，以下の 4 つの研究を用いて検討した。それぞれの研究結果を示す。

（1）生徒の動機づけ志向性が学級内の友人関係の形成と対人・学業適応に及ぼす影響
①動機づけ志向性が学級内の友人関係の形成に及ぼす影響については，社会志向性の高い生徒ほど入学当初から学級内に多くの友人関係を形成しており，女子では２学期後半でも多くの友人関係を形成していることが示された。課題志向性については，学級内の友人関係にはほとんど影響を及ぼさず，むしろ友人関係の形成を阻害している可能性が示唆された。
②学級内の友人関係が適応感や学業達成に及ぼす影響については，志向性からの直接的影響と友人関係を媒介とした間接的影響について検討した。
志向性の直接的な影響については，社会志向性で認められ，社会志向性の高い人ほど対人面，学業面での適応感を高く評定することが示された。
他方，友人関係を媒介とした間接的な影響については，対人面での適応感にはプラスの影響を及ぼすが，学業面での適応感には必ずしもプラスの影響を及ぼすとはいえないこと，とくに学業成績への影響については，多くの友人関係を形成することが逆に学業成績を低下させる可能性が示唆された。
③以上の結果から，学業面での適応感や学業達成を高めるには，親密な友人関係の形成だけでなく，学級全体として学習への動機づけを高めるような目標構造の設定が必要であることが示唆された。

（2）学級内の目標構造と自己効力感が友人関係の形成と学習行動に及ぼす影響
①努力が重視される学級では，積極的な学習行動が促進されるが，教師との関係の良し悪し重視される学級では，積極的な学習行動は阻害されること，また努力，成績，教師関係に関する自己効力感が高い生徒ほど，積極的な学習を多く行っていることが示された。
②また努力重視が積極的な学習行動に及ぼす影響は，努力に関する自己効力感の高さによって違いが認められ，その促進効果は努力に関する自己効力感が低い生徒に顕著に認められることが示された。
③生徒の評価構造の認知とその自己効力間に関する個人差が，学級内の友人関係の形成に及ぼす影響については，成績に関する自己効力感や学習行動の積極性において友人同士の類似性の効果が認められ，成績に関する

自己効力感や学習行動の積極性の類似性が高い生徒ほど，親密な友人関係を形成しやすいことが示された。
④ただし，自己効力感や学習行動に及ぼす友人関係の影響については明確な結果は示されず，形成された友人関係によって，自己効力感や学習行動が影響を受けるという結果は示されなかった。

（3）学級内の目標構造が生徒の学習志向性を媒介として学習行動に及ぼす影響
①パフォーマンスが重視される学級では生徒のパフォーマンス志向は高められるが，生徒のパフォーマンス志向は，生徒のコンピテンスに関わらず，積極的な学習行動を促進しないことが示された。
②マスタリー重視が重視される学級では，生徒のコンピテンスの高さに関わらず，生徒のマスタリー志向が高められ，積極的な学習行動が促進されることが示された。
③学級のマスタリー重視が学習行動に及ぼす影響には，生徒の目標志向を媒介しない効果も認められ，マスタリー重視の学習環境では生徒同士の協調的，協力的な学習活動が促進されることが示唆された。
④ただしコンピテンスの低い生徒では，クラスのマスタリー重視は，マスタリー志向だけでなくパフォーマンス志向をも高める効果が認められ，彼らのパフォーマンス志向をいかに低減させるかが重要であることが示唆された。

（4）学級内の友人関係や学級集団のあり方が個別的学習志向，協同的学習志向に及ぼす影響
①中学生は小学生にくらべて協同的な学習志向，個別的な学習志向のいずれも低く，また男子は女子にくらべて低いことが示された。
②学級内の友人関係のあり方については，中学生は小学生にくらべて学級内の親密な友人が少ない反面，級友との比較意識が高く，学級内の友人関係は親和的で協同的な関係から競争的な関係へと変化していることが示された。
③学級内の友人関係が学習志向に及ぼす影響は，協同的な学習志向と個別的な学習志向で異なっており，協同的な学習志向は学級内の友人関係のあり方に大きく影響されること，また協同的な学習志向を高めるためには，目標やライバルとなる相手だけでなく，親密な友人の存在やクラス受容，クラスの凝集性といった親和的な友人関係の形成が重要であり，これらの学級内の友人関係の影響は，小学生でも中学生でも大きな違いのないことが示された。

本研究の第三の目的である（3）児童生徒の動機づけや学業達成，適応感を高めるためには，教師はどのような働きかけが可能であり，教師の指導のあり方は，児童生徒の友人関係や動機づけや学業達成にどのような影響を及ぼすかについては，以下の 2 つの研究を実施した。結果を示す。

（5）学級内の友人関係のあり方や学習態度，学習目標の学年差，調査時期の推移
①規律や礼儀，学校・学級満足感，授業中の学習態度（話す意欲，聴く意欲）については，学年が上がるにつれて低下しており，また１学期よりも３学期の方が低下していた。他方，児童の学習目標（熟達目標，成績目標）については，学年間に大きな違いは示されず学期間でも大きな変化は示されなかった。
②授業中の学習態度については，話す意欲と聴く意欲はそれぞれ異なる要因に影響されており，聴く意欲については学級内の受容的態度だけでなく，規律や礼儀から影響を強く受けていること，話す意欲については規律や礼儀よりも級友の受容的態度からの影響を強く受けていることが示された。
③これらの結果から，授業において児童同士の協同的な相互作用を促進するには，規律や礼儀といった規範を高めることが必要であり，それが児童の聴く意欲を高め，最終的に児童の話す意欲を高める可能性が示唆された。

（6）教師の指導行動と児童の学級内の友人関係や学習への動機づけ，学業達成との関連
①級友同士の相互作用を促進し，学習に対する動機づけを高める指導行動のあり方については，「学級づくり・雰囲気づくり」「話し合い・グループ活動の確保と工夫」「教師による発言の促進と受容」「話し方・聞き方の指導」「目標設定と成長の評価」「自律性・自発性の尊重」という 6 つのカテゴリーに分類できることが示された。
②上記で得られた教師の指導行動のカテゴリーを参照にして，熟達教師の指導について検討したところ，熟達教師は学級の発達段階に応じて重点的な指導を変えており，教師との信頼関係や児童同士の親密な関係形成，また他者尊重や自律性・自発性といった学級規律の確立に，１学期の多くの時間を費やしていることが示された。また１学期後半頃から行う学習指導では，授業目標と授業で用いる既習事項を明確化するとともに，発言では事実と意見の区別を意識化させること，またそれらを板書やノート指導，話し合い場面で繰り返し行うことで，児童全体に共有，定着させることが示された。
③児童の学習目標や学習態度，動機づけなどの推移について質問紙調査を用いて比較検

討したところ，このような熟達教師の学級児童は他学級の児童にくらべて，１学期の時点ですでに学習目標（熟達目標，成績目標），学校や授業満足感，学習態度（聴く意欲）で有意差が認められ，さらに３学期では学習態度（話す意欲）でも学級間に違いが示された。④ただしNRT学力検査の結果については，学級間に有意差は示されず，相互作用を伴う協同的な学習が，どのような学力を向上させるのかについては，さらに検討する必要が示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 石田靖彦　学校適応感尺度の作成と信頼性，妥当性の検討－生徒評定と教師評定を用いた他特性 - 他方法相関行列からの検討－　愛知教育大学教育実践センター紀要, 12, Pp. 287-292. 2009年 査読無
② 石田靖彦・川村祥世　クラスの目標構造が生徒の学習行動に及ぼす影響：生徒のコンピテンスの違いに着目して　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，11, Pp. 255-261. 2008年 査読無
③ 石田靖彦　動機づけ志向性が中学校進学時の適応過程に及ぼす影響：縦断的研究　愛知教育大学研究報告（教育科学編） 56, Pp. 133-138. 2007年 査読無
④ 石田靖彦　集団構造の把握手法としての社会認知的マッピング法　愛知教育大学教育実践総合センター紀要．10，Pp. 255-260. 2007年 査読無

〔学会発表〕（計２件）

①石田靖彦　相互に学び合う学級づくりと教師の指導：「自由発言」という授業実践とその効果　日本社会心理学第 49 回大会 2008年11月　かごしま県民交流センター
②石田靖彦　理論－実践の架け橋を教育社会心理学から考える：　「自由発言」と呼ばれる授業実践を題材にして　日本教育心理学会第51回総会　2009年9月　静岡大学

６．研究組織
(1)研究代表者
石田　靖彦（ISHIDA YASUHIKO）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：
研究者番号：10314064